

# 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の 葛藤と統合 —育児困難との関連—

豊田史代・岡本祐子

Conflicts between mother-self and personal-self and integration of two selves:  
Relationship with difficulties in child caring

Fumiyo Toyota and Yuko Okamoto

本研究では、育児期の女性を「個人としての自己」と「母親としての自己」という視点から捉え、二つの自己の葛藤における特徴、及び、それぞれの母親が抱えている育児困難の特徴について検討した。対象者は、二つの自己の確立度により4つの自己様態群に分類された。二つの自己の確立度によって、母親役割を受け入れる段階で葛藤している母親、葛藤を回避している母親、葛藤が生じていない母親、葛藤を経て統合させている母親といった葛藤経験の特徴が示された。また、2つの自己の位置づけと葛藤のあり方が、育児困難の内容や程度と関連していることが示唆された。

キーワード：育児期、育児困難、母親役割、葛藤

## 問 題

今日、科学・医学の進歩による長寿化と少産少子化が、育児期間の短縮をもたらし、その結果、母親にとって子育て期間は長い一生のうちのほんの一時に過ぎなくなった(柏木, 1998)。現代の女性は母親であることだけで人生を満たすことは難しくなり、家族との関係を基盤としている専業主婦の女性であっても、母親としてだけではなく、自分自身の個人としての生活・生き方を強く求めている(平山, 1999)。育児期の女性は、子育てに対して肯定的な感情を持っているのと同時に、子育てによって自分の視野や行動が制限されているという「育児による制約感」も感じており、子どもを持つということが、個人としての生き方を求めることとの間に葛藤を引き起こしていることが示唆されている(柏木・若松, 1994)。武内(2002)は、子育て期の女性は、自分のアイデンティティの中に母親役割を統合し、アイデンティティを再構成するという心理学的課題を持っており、それはつまり、自己実現(自分を生かすこと)と、他者(子ども)を生かすこととの統合という課題であるとしている。しかしながら、この「自分を生かすこと」と「他者を生かすこと」はそもそも対立する面をもち、葛藤をはらんでいる(武内, 2002)。

岡本(1996)は、女性にとって育児期は、結婚・出産までに形成してきた個としてのアイデンティティと、新たに母親になることによって獲得されるべき母親アイデンティティが葛藤を引き起こす時期であるとし、この二つのアイデンティティの達成という視点から、育児期の女性のアイデンテ

アイティ様態を捉え、二つのアイデンティティのあり方と家族関係との関連性について考察した。個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの達成度の高さによって、育児期の女性を4タイプに分類し検討した結果、各タイプの育児観や母親観、夫との関わり方などにおける特徴が示された。岡本(1996)は、アイデンティティ様態の各タイプの特徴として、二つのアイデンティティ間の葛藤の在り方における違いを指摘している。しかし、それは、育児観や母親観などから捉えた全体的な意識の把握にとどまっていることから、育児期の女性がこれまでに築いてきた個としての自己と、新たに取り入れることになる母親としての自己との間に起こる葛藤を、どのように経験し統合しているのかといった点について、さらなる詳細な検討が必要であると思われる。

また、育児期の女性が抱えている問題の一つとして、母親の子育てに対する不安感や嫌悪感などが挙げられる。これらの育児に対する母親のネガティブな感情を表すものとして、「育児不安」「育児ストレス」「育児ノイローゼ」など様々な用語が使われているが、一般には、これらを代表する形で「育児不安」が用いられている(岩田, 1997)。育児不安についての先駆的な研究として、牧野(1982)が挙げられる。牧野(1982)は育児不安を、“子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態”(牧野, 1982, p. 34)と定義し、育児不安の5つの特性(一般的疲労, 一般的気力の低下, イライラの状態, 育児不安徴候, 育児意欲の低下)に対応する項目からなる「育児不安尺度」を作成した。その後、この「育児不安尺度」をもとにして、育児不安と母親の性格との関連(中西, 1996)や、育児不安と母親の職業生活の実態・職業生活に関する意識との関連(谷口, 1997)など、育児不安の様々な関連要因を検討する研究が行われている。

本村・磯田・内田(1985)は、牧野(1982)の尺度を使用して、育児不安と母親の属性・子どもの属性・夫との関係などとの関連を検討した。この研究において、牧野(1982)の尺度の有効性はおおむね良好であると評価されたが、育児不安得点の低い母親について、本村ら(1985)は以下のように指摘している。不安の低い母親だから問題がないとは限らず、“子供に関心の薄い母親は、育児不安兆候を表わしにくく、育児全般の問題を考える上では、こうした、無関心な母親の問題も決して無視できない(本村ら, 1985, p. 242)”と述べている。岩田(1997)も同様に、牧野(1982)の尺度は、育児不安が低いほど、より健康的と捉えていることを問題点として指摘しており、育児不安を数量的に測定しようとする、不安の低い母親のなかで、健康的な子育てのために低い結果がでている母親たちと、子ども・子育てに無関心なために低い結果が出ている母親たちとの区別ができないと述べている。そして、このような育児不安を感じていない母親たちも、育児不安尺度では捉えられない育児困難を抱えているはずであると述べている。そのうえで、岩田(1997)は、子育てにおける不安だけではなく困難を説明する分析枠組みを構築することの必要性を述べており、その視点の一つとして、現代社会特有の問題である、母親であるということが女性としての生き方との葛藤を引き起こしているという点を指摘している。これらのことから、母親が抱えている育児における困難さは、育児不安尺度の高低のみで捉えられるような一様なものではなく、母親が置かれている状況や、母親が持つ育児観などにより異なることが考えられる。そして、現代の女性にとって、「母親としての自己」と「個人としての自己」との葛藤をどのように経験し統合してきたのかということは、母親役割を獲得していく過程において重要であり、母親の育児に対する態度にも影響を

及ぼし、その母親が抱える育児困難にも関わっているのではないだろうか。

以上のことから、本研究では、これまでに築いてきた「個人としての自己」と、母親になることによって新たに作り上げていく「母親としての自己」という視点から育児期の女性を捉え、以下の二つの点について検討することを目的とした。

- ①「母親としての自己」「個人としての自己」のあり方と、二つの自己の葛藤の内容や葛藤への関わり方の特徴との関連を検討する。
- ②「母親としての自己」「個人としての自己」のあり方と、育児困難との関連を検討する。

## 研究 I

### 1. 目的

育児期の母親における「母親としての自己」と「個人としての自己」の様態と、母親が抱える育児困難との関連について、質問紙調査によって検討する。

### 2. 方法

#### (1) 調査対象者

乳幼児期の子どもを持つ母親 210 名を対象に質問紙調査を行った。回収率は 55.24% であり、そのうち有効回答を得た 108 名を分析対象とした（有効回答率 51.43%、平均年齢 33.02 歳、レンジ 23—44 歳）。分析対象者の就労形態は、専業主婦 48.15%、フルタイム 29.63%、パート・アルバイト 11.11%、自営 2.78%、休職中 8.33% であった。

#### (2) 実施期間

2006 年 6～11 月。

#### (3) 手続き

以下の手順により、質問紙調査を行った。

- ① A 保育所に子どもを通わせている母親 115 名に実施。保育所の職員から質問紙を手渡しで配布し、自宅にて記入、後日保育所にて回収した。回収率は 43.48% であった。
- ② B 子育てサークルに参加している母親 50 名に実施。切手を貼った封筒に質問紙を入れ、子育てサークルの代表者から質問紙を手渡しで配布し、回答後に郵送することを依頼し、郵送により回収した。回収率は 90.00% であった。
- ③ C 子育て支援センターの活動に参加している母親 45 名に実施。子育て支援センターにおいて、筆者および職員から質問紙を手渡しで配布し、自宅にて記入、後日子育て支援センターにて回収した。回収率は 46.67% であった。

#### (4) 調査内容

以下の内容からなる質問紙を作成した。

- ① 大日向(1988)による「母性意識尺度」の積極的・肯定的受容項目：母親役割を受容し、「母親としての自己」を確立している程度を問うものとして、「母性意識尺度」(大日向, 1988)のうち、積極的・

肯定的な意識を内容とする6項目を採用した。回答は、「その通りである」、「違う」を両極とする4段階での評定を求めた。

②岩田(1995)による「育児期の母親の不安尺度」：育児期の母親の子育てにおける困難さを問うものとして、「育児期の母親の不安尺度」(岩田, 1995)を採用した。「生活疲労」(3項目)、「充実感欠如」(6項目)、「育児不安」(6項目)を表す、合計15項目からなる。回答は、「よくある」、「まったくない」を両極とする4段階での評定を求めた。

③谷(2001)による「多次元自我同一性尺度」：「個人としての自己」を確立している程度を問うものとして、「多次元自我同一性尺度」(谷, 2001)を採用した。「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」(各5項目)を表す、合計20項目からなる。回答は、「非常に当てはまる」、「全くあてはまらない」を両極とする7段階での評定を求めた。

④子どもや育児、母である自分に関する文章完成法(SCT)5項目：各群の母親としての意識の特徴を検討し、半構造化面接での分析の視点を考える際の参考にするために、子どもや育児、母である自分などに関するSCT項目を設定した。岡本(1996)で使用されたSCT項目のうち、夫に関する項目を除いた以下の5項目を使用した：1. 私の人生は、2. 私の生きがいは、3. 子供を育てることは私にとって、4. 子供がいなかったら、5. 私が母であるということは。

⑤回答者の属性(子どもの年齢/性別/出生順位, 回答者の年齢, 職業, 日常の育児サポート)

### 3. 結果

#### (1) 「母親としての自己」「個人としての自己」に基づいた対象者の分類

まず、「母性意識尺度」について、各項目の粗点の合計を項目数で割った得点を母性意識尺度得点とした。母性意識尺度得点の平均値は3.05( $SD=0.57$ ), 中央値は3.00であった。次に、「多次元自我同一性尺度」について、逆転項目は得点を逆転し、各項目の粗点の合計を項目数で割った得点を多次元自我同一性尺度得点とした。多次元自我同一性尺度得点の平均値は4.80( $SD=0.98$ ), 中央値は4.85であった。

「母親としての自己」の確立度と「個人としての自己」の確立度の視点から対象者を分類するため、まず、母性意識尺度得点と多次元自我同一性尺度得点の各々において、中央値を基準に高群と低群に分類した。さらに、母性意識尺度得点の高群低群と、多次元自我同一性尺度得点の高群低群との組み合わせにより、対象者を以下の4群に分類した(Table 1)。これらの群は、それぞれI未熟群、II個人中心群、III母親中心群、IV統合群と命名した。

Table 1. 母親の自己様態4群の定義と各群の人数

タイプ	母性意識尺度	多次元自我同一性尺度	人数(%)
I未熟群	低	低	28 (25.93)
II個人中心群	低	高	16 (14.81)
III母親中心群	高	低	26 (24.07)
IV統合群	高	高	38 (35.19)
合計			108(100.00)

## (2) 「育児期の母親の不安尺度」の構造の検討

本研究における育児期の母親の困難さの構造を検討し、比較の軸としての因子を探るために、育児期の母親の不安尺度について、因子分析を行った。逆転項目については得点を逆転した。まず、「子どもが好きではない」と「子どもがとても可愛い」の項目は、回答の60%以上が一つの選択肢に偏っていたため除外し、残りの13項目を用いて分析を行った。因子の抽出には重みなし最小2乗法を用いた。まず、固有値1以上の基準を設け、プロマックス回転を行った結果、5因子が抽出された。固有値の下降程度及びブスクリープロット、因子の解釈を考慮し、先行研究と同じ3因子を採用し、再度因子分析を行った。その後、因子負荷量0.35という基準を設け、因子分析を2回行った。その結果、2項目が除外され、計11項目が採用された (Table 2)。

Table 2. 「育児期の母親の不安尺度」項目の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3
<b>因子1: ゆとりのない生活 (<math>\alpha=0.68</math>)</b>			
生活の中にゆとりを感じる	<b>0.89</b>	-0.01	-0.01
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	<b>0.67</b>	0.01	0.01
朝、目覚めがさわやかである	<b>0.39</b>	0.01	0.16
毎日くたくたに疲れる	<b>0.36</b>	0.01	-0.01
<b>因子2: 育児による閉塞感 (<math>\alpha=0.71</math>)</b>			
子どもとばかりいて、孤立した感じがする	-0.15	<b>0.89</b>	0.01
子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという実感がない	0.11	<b>0.57</b>	-0.13
自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.01	<b>0.56</b>	0.01
毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.16	<b>0.39</b>	0.12
<b>因子3: 充実感の無い育児 (<math>\alpha=0.68</math>)</b>			
育児によって自分が成長していると感じられる	-0.19	-0.01	<b>0.75</b>
子育てが楽しく毎日が充実している	0.14	0.11	<b>0.67</b>
自分は子どもをうまく育てていると思う	0.11	-0.11	<b>0.53</b>
<b>因子間相関</b>	<b>因子1</b>	<b>因子2</b>	<b>因子3</b>
		0.48	0.46
	<b>因子2</b>		0.40

除外項目: 「子どもを置いて外出するのは心配で仕方がない」  
「子どもがわずらわしくていらいらする」

因子1は、岩田(1995)の研究で「生活疲労因子」とされた項目に、「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」の項目が加わった因子であり、子育ての生活に追われて余裕が無い状態を示していることから、「ゆとりの無い生活」とした。因子2は、岩田(1995)の研究で「充実感欠如の因子」とされた項目から、「子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない」と「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」の項目が除かれた因子であり、子育てのために子どもと密着した生活の中で、閉塞感を感じている状態を示していることから、「育児による閉塞感」とした。因子3は、岩田(1995)の研究で「育児不安の因子」とされた項目から、「子どもがわずらわしくていらいらする」「子どもが好きではない」「子どもがとても可愛い(逆転)」の3項目が除かれた因子であり、残った3項目は、子育てを楽しみ充実している状態を示しており、それが全て逆転項目であることから、

「充実感の無い育児」とした。

各因子について、因子負荷量が 0.35 以上の項目を選択し、粗点(1 から 4 点)の合計を項目数で割った得点を各因子の得点とした。各因子の信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ 係数)はそれぞれ、「ゆとりの無い生活」が $\alpha=0.68$ 、「育児による閉塞感」が $\alpha=0.71$ 、「充実感の無い育児」が $\alpha=0.68$ であった。「ゆとりの無い生活」と「充実感の無い育児」に関しては、 $\alpha=0.68$ とやや低い値であったが、項目数がそれぞれ4と3であり、少ないことから、本研究ではこの項目を採用した。

### (3) 母親の自己様態と育児における困難さとの関連

母親の自己様態と育児における困難さとの関連を検討するため、母親の自己様態4群ごとの、「育児期の母親の不安尺度」各因子得点の平均値を求め、自己様態と育児期の母親の不安尺度因子との2要因の分散分析を行った。

分散分析の結果、母親の自己様態の主効果が認められ( $F(3, 104)=12.83, p<.001$ )、育児期の母親の不安要因の主効果が認められた( $F(2, 208)=42.24, p<.001$ )。また、母親の自己様態と育児期の母親の不安との交互作用も有意であった( $F(6, 208)=3.19, p<.01$ )。そこで、単純主効果の検定を行った結果、全ての育児期の母親の不安因子において、母親の自己様態の単純主効果が有意であった(「ゆとりのない生活」 $F(3, 312)=4.94, p<.005$ ；「育児による閉塞感」 $F(3, 312)=8.62, p<.001$ ；「充実感の無い育児」 $F(3, 312)=10.01, p<.001$ )。また、全ての母親の自己様態において、育児期の母親の不安要因の単純主効果が有意であった(未熟群 $F(2, 208)=9.85, p<.001$ ；個人中心群 $F(2, 208)=9.34, p<.001$ ；母親中心群 $F(2, 208)=17.28, p<.001$ ；統合群 $F(2, 208)=15.34, p<.001$ )。

以上の分析において、単純主効果が有意であったものについて、Ryan法による多重比較を行った。4群ごとの「育児期の母親の不安尺度」各因子得点の平均値と標準偏差、および、多重比較の結果をTable 3にまとめた。また、各群の育児期の母親の不安尺度各因子得点について、グラフにまとめた(Figure 1)。

Table 3. 母親の自己様態群ごとの育児期の母親の不安尺度因子得点の平均値と多重比較結果

	未熟群 $M(SD)$ 28名	個人中心群 $M(SD)$ 16名	母親中心群 $M(SD)$ 26名	統合群 $M(SD)$ 38名	多重比較
ゆとりのない生活	2.96(0.43)	2.63(0.66)	2.61(0.42)	2.39(0.56)	未熟>統合
育児による閉塞感	2.65(0.58)	2.06(0.76)	2.44(0.56)	2.00(0.54)	未熟>個人,統合 母親>個人,統合
充実感の無い育児	2.38(0.48)	2.27(0.44)	1.87(0.37)	1.67(0.41)	未熟>母親,統合 個人>母親,統合
多重比較	ゆとり>閉塞>充実	ゆとり>閉塞, 充実	ゆとり, 閉塞>充実	ゆとり>閉塞>充実	

注) ゆとりのない生活=ゆとり, 育児による閉塞感=閉塞, 充実感の無い育児=充実  
未熟群=未熟, 個人中心群=個人, 母親中心群=母親, 統合群=統合

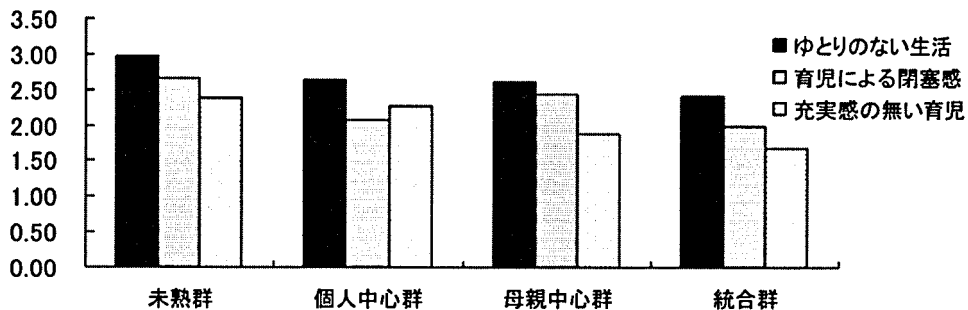


Figure 1. 自己様態別にみた母親の不安尺度因子得点

未熟群は統合群に比べて、すべての母親の不安尺度因子得点が高かった。また、個人中心群は、「育児による閉塞感」は未熟群と母親中心群に比べて低いが、「充実感の無い育児」は統合群と母親中心群に比べて高かった。一方、母親中心群は、「育児による閉塞感」は統合群と個人中心群に比べて高いが、「充実感の無い育児」は未熟群と個人中心群に比べて低かった。

#### (4) 母親の自己様態群ごとの SCT 反応内容の特徴

子どもや育児、母である自分に関する文章完成法(SCT) 5項目について、項目ごとに、各群の反応内容の特徴を Table 4～8にまとめた。

Table 4. S C T 「私の人生は」における各自己様態群の反応内容の特徴

未熟群	「楽しい」「幸せ」「充実」など、自分の人生をポジティブに捉えた回答が無かった。「見通しが無い」「不明確」など、自分の人生に対する意識が漠然としている回答がみられた。
個人中心群	「楽しい」「順調」「望み通り」のように、自分のこれまでの人生をポジティブに捉え、うまくできていると感じている反応が多かった。「気ままに」という回答は、この群のみにみられた。
母親中心群	「楽しい」「幸せ」「順調」など人生を肯定的に捉えた回答がある一方で、「見通しが無い」という人生に対して漠然とした不安を抱えている回答もみられた。また、自分の人生はもう決まっいてこの先変わらないという「決定済み」の回答はこの群のみにみられた。「出産で変化」や「子育て後に始まる」など出産や育児を人生の一区切りとして捉えている回答もみられた。
統合群	「楽しい」「幸せ」「順調」「充実」など、自分の人生を肯定的に捉えている回答がほとんどを占めていた。「家族と共に」「子育て奮闘」のように、家族との関わりについての反応がみられた。

Table 5. S C T 「わたしの生きがいは」における各自己様態群の反応内容の特徴

未熟群	「特に無し」「分からない」など、自分の生きがいが不明確な回答が多かった。また、「子ども」「家族」など、家族に関する回答は、母親中心群や統合群に比べて少なかった。
個人中心群	「子ども」「家族」「子供と家族」など家族に関する回答は、母親中心群や統合群に比べて少なかった。「仕事」の回答はこの群のみにみられ、「習い事」「自分の成長」「自分の時間」など、子供や家族とは離れた個人としての自分に関することを挙げた回答がみられた。
母親中心群	「子供」「家族」「子育て」のように、子供や家族に関する回答がほとんどを占めていた。
統合群	「子供」「家族」「子供と家族」など、子供や家族に関する回答が多かった。「人との関わり」「家族と友達」のように、家族のみではなく、友人のように家族以外の人との触れ合いについての回答は、この群のみでみられた。

Table 6. SCT「子供を育てることは私にとって」における各自己様態群の反応内容の特徴

未熟群	「楽しみ」「幸せ」のように、肯定的にのみ捉えている反応は少なく、「楽であり、苦であり」のように、肯定的な面と否定的な面とを捉えている反応がみられた。「自分の成長」「勉強・修業」「自分を見つめ直す機会」のように、自分と向き合い、成長させてくれるものとして子育てを捉えている回答が多かった。
個人中心群	「自分の成長」の回答が無かった。「楽しみ」「すばらしいこと」など、子育てに対して肯定的に捉えている回答や、「楽であり、苦であり」のように、肯定的・否定的の両側面を捉えている回答がみられた。
母親中心群	「楽しみ」「幸せ」のように、肯定的に捉えている回答が多かった。「自分の成長」という回答が多く、それ以外にも、「勉強・修業」「自分を見つめ直す機会」「成長かつ楽しみ」などのように、自分の成長と関連する回答がみられた。
統合群	「自分の成長」という回答が多かった。「楽しみ」「幸せ」のように肯定的に捉えている回答もあった。「生きがい」「やりがいがある」のように、積極的に子育てに取り組んでいる回答が他の群に比べて多かった。

Table 7. SCT「子供がいなかったら」における各自己様態群の反応内容の特徴

未熟群	「考えられない」「楽しみが減る」など、子どもの存在の大きさを伺わせる回答が多かった。「未熟な人間だっただろう」「成長できなかった」など、子供の存在による自己の成長についての反応もみられた。「それなりにしている」「仕事中心の生活」「別の人生」など、子供がいらないりの人生を過ごすという回答もみられた。
個人中心群	「寂しい」「それなりの人生だが寂しい」「今の自分はない」「楽しみが減る」など、子供の存在の大きさをうかがわせる回答がある一方で、「自分のやりたいことをする」「仕事に専念」など、個人としての自己実現についての回答もみられた。
母親中心群	「それなりの人生だが寂しい」「楽しみが減る」など、子供が情緒的な支えであるという回答や、「未熟な人間だっただろう」「今の自分はない」など、子供の存在が現在の自分に大きく関わっているという回答が多くみられた。「自分のやりたいことをする」「仕事に専念」のように、個人としての自己を求める回答もみられた。
統合群	「それなりの人生だが寂しい」「楽しみが減る」のように、子供が情緒的な支えであるという回答や、「未熟な人間だっただろう」「今の自分はない」のように、子供の存在が現在の自分に大きく関わっているという回答が多くみられた。その一方で、「夫婦二人の時間を楽しむ」「やりたいことをする」「それなりにしている」など、子供がいらないりの人生を過ごすという回答もみられた。

Table 8. SCT「私が母であるということは」における各自己様態群の反応内容の特徴

未熟群	「自分が成長すること」という回答が一番多く、母であることにより人間的に成長できたという回答がある一方で、「不思議」「自信が無い」「驚き」のように、母であることを受容しきれていない回答も多く見られた。
個人中心群	「不思議」「自信が無い」「反省」のように、母親であることを受容できていない回答が多くみられた。「幸せなこと」「誇り」「喜び」「感謝」など、母親であることを肯定的に捉えた回答は少なかった。
母親中心群	「守るべきものがある」「家族のために」など、子供や家族を守るという回答や、「自信」「心の支え」「充実した毎日」「誇り」のように、母親であることが現在の自分を支えているという回答がみられた。一方で、「不思議」「自信がない」など、母親としての自分を確立できていない回答もみられた。
統合群	「喜び」「幸せなこと」「感謝」のように、母親であることを肯定的に受け止める回答や、「責任」「誇り」のように、母親であることの意味を深く受け止め、母親であることを自己の支えとしている回答が多かった。



#### 4. 考察

本研究の目的は、育児期の母親における「母親としての自己」と「個人としての自己」の様態と、母親が抱える育児困難との関連について、質問紙調査によって検討することであった。

本研究では、母親の育児における困難さを検討する尺度として、育児期の母親の不安尺度(岩田, 1995)を用いた。因子分析により、本研究における育児期の母親の困難さの内容と構造を検討した。まず、「子どもが好きではない」と「子どもがとても可愛い」(逆転項目)の二つの項目が回答の偏りのため除外された。この二つの項目は、子どもへの根本的な愛情を問う質問項目である。しかし、本研究における対象者は、仕事などで忙しい中で子育てに関する質問紙に回答することができる母親や、子育てサークルや子育て支援センターの活動に参加している母親であり、子育てに向き合っている母親であると思われることから、子どもへの根本的な愛情を問う項目への回答が偏ったと考えられる。岩田(1995)は、子どもへの離反の感情を示す項目としてこの二つの項目を設定したが、育児に取り組んでいる母親の中の子どもに対する離反の感情を捉える項目としては、表現を検討する必要があると思われる。因子分析の結果、岩田(1995)と同様に三因子が抽出された。本研究における「ゆとりの無い生活」「育児による閉塞感」「充実感の無い育児」は、それぞれが岩田(1995)の「生活疲労因子」「充実感欠如の因子」「育児不安の因子」に対応する内容だった。「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」という項目は、岩田(1995)の研究では、育児のために自分が犠牲となっていて充実感を得られない状態を示す「充実感欠如の因子」に含まれていた項目であったが、本研究では、生活の中での疲労感やゆとりの無さを示す「ゆとりの無い生活」に含まれた。本研究の対象者にとって、「子どもを育てるためにがまんばかりしている」という気持ちは、育児のために孤立し閉塞感を感じているためというよりも、日常の生活の忙しさやゆとりのなさのために感じている気持ちであるということが考えられる。

次に、母親の自己様態と育児における困難さとの関連について検討した。その結果、まず、未熟群は統合群に比べて、不安尺度の全ての因子得点が高かった。このことから、「母親としての自己」も「個人としての自己」も共に確立されていない母親は、生活の中でのゆとりの無さも、子育てによる閉塞感も感じており、子育てにおける充実感が感じられていないことが示唆された。次に、「育児による閉塞感」は、母親中心群が個人中心群と統合群に比べて高く、「充実感の無い育児」は、個人中心群が母親中心群と統合群に比べて高かった。また、未熟群と統合群においては、「ゆとりの無い生活」「育児による閉塞感」「充実感の無い育児」の順で、因子得点が高かったが、個人中心群では、「ゆとりの無い生活」が「育児による閉塞感」と「充実感の無い育児」に比べて高く、母親中心群では、「ゆとりの無い生活」と「育児による閉塞感」が「充実感の無い育児」に比べて高かった。これらのことから、まず、生活の中でのゆとりの無さは、全ての母親が強く感じていることが明らかになった。また、母親中心群は、子育てによる閉塞感を強く感じていることが明らかになった。母親中心群の母親は、母親としての役割にコミットしている一方で、子育て中心の生活の中で孤立感を感じ、自分らしさを発揮できていないと強く感じていることが示唆された。個人中心群は、子育てにおける充実感をあまり得られていないことが明らかになった。個人中心群の母親は、「母親としての自己」が自分のなかで確立されておらず、母親としてのやりがいや充実感があまり実感でき

ていないことが示唆された。以上のことから、母親の自己様態により、抱えている育児の困難さの特徴が明らかになった。

また、各自己様態群の母親としての意識の特徴について検討するため、SCT 反応内容を項目ごとにまとめた。その結果、まず、未熟群の母親は、自分の生きがいや自分の人生に対しての意識が不明確であり、自分の人生を肯定的に捉えていないことが示された。また、子育てに対しては、肯定的な面と否定的な面の両面を感じており、積極的に母親としての自分を受け入れているわけではないが、子育てを通して自分自身を見つめなおし、成長している自分を感じていることが示唆された。次に、個人中心群の母親は、自分自身の人生を肯定的に捉えていることが明らかになった。また、生きがいとしては、家族よりも、仕事や自分の時間など家族や子どもと離れた個人としての自分についてのことを挙げており、一人の人間としての自分を中心に据え、母親としての自分という視点が弱いことが示された。さらに、子育てを通しての自分の成長を感じておらず、母親としての充実感が少ないことが示唆された。母親中心群の母親は、子どもや家庭が自己の中心を占めており、母親であることが自分の人生を規定している大きなものであると感じていることが示唆された。また、子育てを通じた自己の成長を感じているが、自分の人生に対するあきらめがみられる回答や、これからの人生に対する漠然とした不安を示す回答もあり、母親中心である自分の人生を肯定的に捉えている人と、そういった人生に対して自信を持っていない人もいることが示された。また、統合群の母親は、自分自身の人生を肯定的に捉えており、家族や子どもとの関わりを自分の人生の中心に据えていることが示唆された。また、子育てに対して、積極的に取り組み、そこから得られるものを自分の成長に繋げていることが示された。さらに、子どもを情緒的な支えや自己の存在の支えとしているが、その一方で、それ以外の人生も視野に入れていることが示唆された。

## 研究 II

### 1. 目的

研究 I では、母親の自己様態を分類し、自己様態と育児困難との関連を数量的に検討し、また、SCT をもとに、各自己様態群の人生の捉え方や母親としての意識の特徴を検討した。しかし、「母親としての自己」と「個人としての自己」が、母親となる以前から現在に至るまで、どのように位置づけられ、2つの自己の葛藤をどのように経験し統合しているのかという点、2つの自己のありかたが育児困難とどのように関わっているのかという点については検討されていない。

そこで、研究 II では、育児期の母親の自己様態群ごとに、2つの自己の葛藤と統合のあり方の特徴を検討し、育児困難との関わりについて質的に検討することを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 調査対象者

研究 I の調査対象者のうち、面接調査への協力を求め承諾を得た 8 名。

## (2)実施期間

2006年8～12月。

## (3)手続き

個別の半構造化面接を行った。面接調査を実施するにあたり、広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承諾を得ている。面接を行う前に、本研究の目的、録音、筆記記録、結果の公表について説明を行い、面接承諾書に署名捺印を得た。面接回数は各対象者につき1回、面接所要時間は約60分～100分であった。面接の場所は、対象者の希望に基づき、保育園内の相談室等で行った。面接内容は全て調査対象者承諾の上、テープレコーダーおよび筆記による記録を行った。対象者のうち1名は面接内容の記録を、筆記記録のみで行った。

面接の質問項目は以下の通りである (Table 9)。対象者の自発的な語りを尊重し、あらかじめ設定した調査項目で、足りないと思われる項目について適宜質問を行った。

Table 9. 半構造化面接の調査項目

- 
1. 母親になる以前の頃について
    - ・どのような将来設計をたてていたか
    - ・どのような目標を持っていたか
    - ・自分が母親になることについて、どのように考えていたか
  2. 妊娠した時について
    - ・妊娠がわかったときの気持ち
    - ・これまでの生活が変わることについて
    - ・迷いや不安は無かったか
  3. 出産した時の気持ち
  4. 現在に至るまでの子育て
    - ・実際に子育てをしてみて感じたこと (迷い・不安・楽しみ)
    - ・これまでの生活との違いについて
    - ・自分にとって、「母親としての自分」はどのような存在か
    - ・自分にとって、母親としての部分を除いた「個人としての自分」はどのような存在か
  5. 現在の育児について
    - ・育児をしていて難しいと感じること
    - ・育児をしていて楽しいと感じること
  6. 将来について
    - ・これからの人生で大切にしていきたいこと
    - ・これからの目標
- 

## (4)分析

以下の手順により、語られた内容を分析した。

- ①対象者ごとに、語られた内容を全て逐語記録にした。
- ②調査対象者を、研究 I における母親の自己の様態群の分類に従って、4つの群に分類した。
- ③研究 I における S C T の結果をもとに、分析の観点を設定した (Table 10)。
- ④自己様態群ごとに、分析の観点に従って、各群の特徴となる語りを抽出した。
- ⑤抽出された語りについて、分析の観点に従って考察した。

Table 10. 語りの分析の観点

分析カテゴリ	分析の視点
①母親になる以前の将来設計・ 母親になることへの意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような目標を持ち、どのように取り組んでいたのか。</li> <li>・自分が母親になることについて、どのように考えていたのか。</li> <li>・母親になるということに、どれくらい実感を持っていたのか。</li> </ul>
②妊娠時の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妊娠がわかった時の気持ち。</li> <li>・母親になることを実感したか。</li> <li>・母親としての今後の生活に不安や迷いは無かったか。</li> </ul>
③子育てにおける制約感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何に対する制約感か。</li> <li>・どれくらいの強さか。</li> <li>・それに対してどのように対処したのか。</li> </ul>
④子どもの存在の意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもに対してどのような想いを持っているのか。</li> <li>・子どもとの心理的な距離はどれくらいなのか。</li> <li>・母親としての経験から、どのようなことを得たと思っているのか。</li> </ul>
⑤今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからの人生で何を大切にしていきたいと思っているのか。</li> <li>・将来設計をどのように立てているのか。その明確さ。</li> </ul>
⑥母親としての自己の 位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母親としての自分をどのように捉えているのか。</li> <li>・母親としての自分を、自分の生き方にどのように位置づけているのか。</li> </ul>
⑦個人としての自己の 位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母親としての部分を除いた自分について、どのように捉えているのか。</li> <li>・母親としての部分を除いた自分を、自分の生き方にどのように位置づけているのか。</li> </ul>
⑧子育てを通しての悩み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのようなことに悩んでいるのか（悩みの質/深さ）。</li> <li>・それに対してどのように対処したのか。</li> <li>・また、どのような支えを得られているのか。</li> </ul>

### 3. 結果および考察

まず、調査対象者のプロフィールを、Table 11 にまとめた。

Table 11. 調査対象者のプロフィール

対象者	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
年齢	41歳	33歳	35歳	35歳
家族構成	夫, 長女(9), 次女(8), 長男(6)	夫, 長女(5), 長男(2)	夫, 長女(5), 次女(2)	夫, 長男(5)
現在の職業	フルタイム	主婦	フルタイム	パート
日常の子育ての援助	配偶者/保育園	配偶者/保育園	配偶者/祖父母/親 戚/保育園	配偶者/祖父母/保 育園
母性意識尺度得点	3.17	3.67	3.83	3.67
多次元自我 同一性尺度得点	5.55	5.90	4.05	4.95
自己様態群	統合群	統合群	母親中心群	統合群

対象者	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
年齢	34歳	31歳	33歳	32歳
家族構成	夫, 長女(11), 次女(7), 長男(3)	夫, 長男(4), 長女(2)	夫, 長男(5), 次男(2)	夫, 長女(3)
現在の職業	主婦	主婦	主婦	主婦
日常の子育ての援助	配偶者	配偶者	配偶者/友達	配偶者
母性意識尺度得点	3.00	3.50	2.83	2.00
多次元自我 同一性尺度得点	5.40	4.50	6.45	3.95
自己様態群	統合群	母親中心群	個人中心群	未熟群

次に、母親の自己の様態群ごとに、分析の観点に従って各群の特徴的な語りを抽出し、さらに、抽出した語りについて分析の観点にもとづいて考察を行った。母親の自己様態群ごとに、分析の観点に従って抽出した語り、それについての考察をTable 12～15にまとめた。

分析の観点に従って得た考察に基づいて、育児期の母親における「母親としての自己」と「個人としての自己」のありかた、その間の葛藤と統合のありようについて各群の特徴を検討し、さらに、「母親としての自己」と「個人としての自己」のあり方と母親が抱える育児困難との関連について考察した。

### (1) 未熟群

未熟群の母親は、母親となる以前から現在に至るまで、自分のやりたいことがはっきりとしておらず、自分の人生に対して主体的に関わる姿勢が見られなかった。そのため、「個人としての自己」が自分の中で十分に育っておらず、漠然としたものであることが示唆された。また、自分が母親であることについて実感を持っておらず、母親であることによる喜びや充実感を得ていないことが示された。このことから、土台となる「個人としての自己」が漠然としたものであるため、これまで作り上げてきた「個人としての自己」とは何か、「母親としての自己」とは何かという問い直しを深めることができず、「母親としての自己」を育てることができていないことが推察された。

未熟群の母親は、「個人としての自己」も「母親としての自己」も確立されていないため、2つの自己の両方を大切にしたいために葛藤が経験されるということではなく、母親であることが自分のなかで受け入れられていない中で、現実的に母親としてやっていかなければならないことによる葛藤を感じていると考えられる。未熟群の母親は、「母親としての自己」を受け入れられていない状態のなかで、子どもと向き合わなければならず、母親としての不安全感を強く感じていることが示唆される。未熟群の母親が育児の中で感じている困難さは、とにかく子どもと離れる時間が欲しいといったものや、子どもが意図していることや考えていることがわからず、どう関わればいいのか分からないといったものであり、「母親としての自己」が受容されておらず、母親としてのあり方を模索している状態であることによる困難さではないかと考えられる。

大日向(1995)は、育児に難しさを感じている母親の一つのタイプとして、育児への忌避感が強く、虐待に近い対応をしている母親を見出し、このタイプの母親の特徴として、母親自身の育児観が未熟であり、子どもを育てることへの自覚が欠如していることを挙げている。本研究における未熟群の母親も、育児観が未熟であり、子どもを育てることへの自覚が弱いが、大日向(1995)が示したような、忌避感が強く虐待に近い対応をしているという特徴はみられなかった。これは、本研究における対象者は、仕事などで忙しい中で子育てに関する質問紙に回答することができる母親や、子育てサークルや子育て支援センターの活動に参加している母親であり、未熟群といえども、子育てに向き合っている母親と思われるためであると考えられる。

Table 12. 未熟群 (Hさん) の特徴的な語りと考察

分析カテゴリ	特徴的な語り	考察
①母親になる以前の 将来設計・母親に なることへの意識	「(将来の目標は)いや、別に、こうしていきたくていうのは無かったかな。」 「(その頃の仕事を選んだのは)周りがそういう風に固めていったっていう感じ。本人としては、別に嫌いじゃないからやってもいいし。」 「(母親になるという意識は)全く無かった。無かったですね。というか、私のはちゃめちゃんだから、母親になるという感覚も無かった。」	自分の人生について明確な目標がなく、主体性があまりみられなかった。自分自身がやりたいことよりも、周りの意向をそのまま取り入れ、それについて吟味していなかった。自分の人生に対して受身的であると思われる。
②妊娠時の気持ち	「(母親になる実感は)あんまりね。お腹のなか、つわりがあるわけでも無く、ただ単に、お腹が出てきた、でっばったかという感じで。」 「(自分の時間が無くなる不安は)そういうのは無かった。全然、それは思わなかった。自分の時間って、何のために必要なんだろうって思ったりする方だから。」	妊娠が分かったときの感動や喜びは感じていなかった。母親になることの実感もなかった。今後の生活についてイメージできていないため、不安や迷いは無かったことが示唆された。
③子育てにおける 制約感	「24時間365日そばにいるっていう人がいなかったでしよ。今までが。こう、生きてるうちに。」 「それがね、ちょっと自分の中に今まで無かったことだったから。息がつまっちゃったってとことがありますよね。」 「だから、ぐち電話、ぐちメール。で、たまに普通の日にあったりして、それでだいがストレス解消してたり。」	子どもと離れる時間が無いことに制約感を感じていた。自分のやりたいことができないことへの制約感ではなく、物理的に離れる時間が無いことに制約感を感じていた。それに対して、他の人と交流することで、制約感を解消しようと試みていた。
④子どもの存在の 意味づけ	「遺伝子が残せたという感覚しかないし。子どもを産んでよかったって思うことも、別に『笑顔がかわいいから』とかそういうことも思わないし。」 「子どもの考えることがわからない。やっぱ、子供って未知の世界っていうか。」	子どもを理解できない存在と感じていた。子供への愛着が弱く、子育ての中で楽しいと思うことも語られず、子どもに情緒的な価値を見出していないことが推察された。
⑤今後の見通し	「(目標は)今は無い。とりあえず、私の希望は、まあ55まで生きればいいかみたいな。あまり長生きしたくないなとか。」	これからの人生での明確な目標や希望などが無く、今後の自分の人生について、漠然としていた。自分のこれからの人生に対して、主体性がみられなかった。
⑥母親としての自己 の位置づけ	「(母親としての自分は)結構、びっくりですよ。自分の感覚でいくと、子は育てられないと思ったんですよ。自分のちっちゃい頃を振り返ってみると、うーん、母親には向いてないみたいなの。」	母親であることに驚きをもっており、「母親である」ということが、自分の中で定着していないと思われた。自分の人生が漠然としているため、「母親としての自己」を位置づける土台が無いのではないかと示唆された。
⑦個人としての自己 の位置づけ	「(母親としての部分を)除いた自分。わからない。」 「(自分がやりたいこと)今は特に無いですよ。」 「(外に出て働きたいという気持ちは)それも無い。っていうか、あんまり働きたくもないしね。のんきでいたい。」	結婚する以前から、現在に至るまで、自分のやりたいことや目標などが無く、自分自身の意思が漠然としており、「個人としての自己」も漠然とした状態であると示唆された。
⑧子育てを通しての 悩み	「困ったこと、大変なこと。とりあえずこいつ、こいつがわからない。ただ大変みたいなの。何が気に食わないんだろうとか。」 「(子どもがぐずった時には)とりあえず、ほっとくとかね。やりたいだけやれみたいな。そんな感じですよ。だって、つついたらつついただけ、『いやー』とか、さっきみたいにビシバシ叩いたりなんだかんだするから、ほっとくしかない。」	子どもが意図していることや、考えていることがわからず、子供と関ること自体に難しさを感じていることが示唆された。いうことをきいてくれない子どもに対して、どのように対応していいのかわからず、ただ途方に暮れていることが推察された。

## (2) 個人中心群

個人中心群の母親は、母親になる以前から子育てをしている現在に至るまで、自分のやりたいことや目指すものがはっきりとしており、それに向けて主体的に関わり、自分の人生に対して肯定的な捉え方をしていることが示された。また、自分のやりたいことを中心と考えて子どもを産む時期を選択し、母親となっても生活スタイルを変化させないようにしていることなどから、母親であることよりも個人としての自分を重視していることが示唆された。さらに、母親としての自分は、自分の中にある色々な側面の一側面であると捉えていることが示された。これらのことから、個人中心群の母親は、「個人としての自己」がしっかりと確立されており、「個人としての自己」を自分の軸として、「母親としての自己」は自分がとる役割の一つと捉えていることが推察された。

個人中心群の母親は、子育てによって自分の生活が制約されるということがないように、子育てをしながらも「個人としての自己」を大切にできるやり方を探して行動を起こし、「母親としての自己」と「個人としての自己」との間の葛藤が深くなる前に、葛藤を回避する対処をしていることが考えられた。葛藤を回避する対処としては、子どもがいても友達と遊んだり自分だけの時間を積極的に作ったりするといったことや、子育てが中心になる現在の生活に具体的な期限を設定し、割り切って受け入れるようにしていることなどがなされていた。

個人中心群の母親が抱える育児困難について、研究Ⅰでは、育児による閉塞感はあまり感じていなかったが、育児を通しての充実感が得られていないことが特徴として示された。育児による閉塞感をあまり感じていないのは、育児による制約を受けないように自ら対処しているためであり、子育てによる充実感が得にくいのは、母親であることの価値を重視していないためではないかと考えられる。研究ⅠのSCTにおける個人中心群の特徴として、母親であることによる喜びや充実感があまり感じられていないことや、子育てを通して何かを得たという実感がないことが示された。面接対象者のGさんは、子どもに刺激をうけて自分自身が成長しているという実感は語られたが、母親であることによる喜びや母親であるからこそ得られる充実感などは語られなかった。家族の中にあっても個人としての自分を重視する傾向が強い人は、子どもは親の精神的な支えであり、家庭を明るくするといった子どもの情緒的な価値を低く評価することが明らかになっている(柏木・永久, 1999)。このことから、「個人としての自己」を重視する個人中心群の母親は、子どもの情緒的な価値を低く評価しており、母親であることによる充実感が得にくいのではないかと考えられる。また、個人中心群の母親は、現在、自分自身のこれまでの子どもへの関わり方を反省し、自信をなくしていることが示された。これは、「個人としての自己」を重視してきたことについての迷いからくるものではないかと推察される。

岡本(1996)は、母性意識は低いが個としてのアイデンティティ達成は高い「独立的母親型」の母親の特徴として、個としての生き方が前面に出ていることをあげており、本研究における個人中心群の母親の特徴と一致した。しかし、岡本(1996)は、「独立的母親型」は母親であることにアンビバレントな感情が強く葛藤状況にあると述べているが、本研究における個人中心群の母親は、母親であることを自分の一側面として割り切って位置づけており、アンビバレントな感情を抱くことがないように事前に対処していることが示された。

Table 13. 個人中心群 (Gさん) の特徴的な語りと考察

分析カテゴリ	特徴的な語り	考察
①母親になる以前の 将来設計・母親に なることへの意識	「ずっと仕事はねしとこうと思ったから。子どもの年とか産まれるのも、そっちを優先じゃないけど、仕事をたぶん優先してきたと思うんです。」 「しばらく3年くらい、もう仕事と、あとなんていうんだろう、色々旅行とかそういうのに行きたくて、結構そういう期間を設けていたから。」	仕事や自分のやりたいことを中心に考えた上で、子どもを産む時期を選択していた。自分自身の人生の筋があって、そこに母親になる時期を選択して加えていることが推察された。
②妊娠時の気持ち	「妊娠したから仕事を辞めなければならないとか、そういう目で見られるのも嫌だったし。自分はそれでもやっていけるんだっていうような。やっぱり子どもに制限されなくなかった。」 「妊婦とか母親になることで、生活の基本的なスタイルとかが全然変わらないというか。」	子どもを持つことで生活が変化し、制限されることを嫌い、ただ不安を抱くのではなく、子どもを持つてもこれまでの生活を維持させていく強い意思を持っていたことが示唆された。
③子育てにおける 制約感	「下の子は私が全部見る感じで。主人は仕事でいないし。だから、全部一人でやったりして。」 「それでもね、友達とはよく遊んでたと思う。」 「(これまでの生活と変わったこと) たぶん、本当は嫌だったんだと思う。自分の中では嫌だと思いうけど、でも自分が受け入れないと家が回らないんですよ。」 「そこまでいくと、『仕方ない、自分がやるしかない』みたいな。潔く、一年なら一年ってしようと思って。割り切りじゃないけど、そうしないとやっていけないみたいな。」	一人で子どもや家族の世話をしなければならず、これまでの生活が変化したことに負担感を持っていた。しかし、その中でも、友達と遊ぶなど自分自身の時間を作るようにしたり、子育て中心の生活を送る具体的な期限を設定して現在の状況を割り切って受け入れたりと、深く葛藤を感じて悩む前に、自ら動いて対処していることが示唆された。
④子どもの存在の 意味づけ	「(子ども) は、好き。よその子も。よその子も可愛いと思うし。」 「自分の考えを押し付けないというか、特に、彼(長男) は自分の考えがすごいあるし、なるべくなんでも彼にやれることは任せてる。」 「尊敬、私が彼を尊敬します。すごいな一つ。」	子どもに対して肯定的な感情をもっていた。自分の子供に対して、独立した人間として尊重して扱っており、「我が子」という視点よりも大人と同等の視点で見ていることが示唆された。
⑤今後の見通し	「とりあえず仕事はしたいんですけど。前と同じ職種に帰りたいというか、その職種で勤めたい。」 「ちょっと下の子が幼稚園に入ったら、今年なんか資格を何個か取ろうかなと思って。」 「そういう時間とか、子供連れてったりとか、そういうアウトドアをしたい。」 「子供ばかりやらせてもだめかなと思って。」 「親も動かないとダメだろうっていうのがある」	仕事について具体的な目標が語られた。また、子どもにも何かを与えるという一方的なものではなく、供に体験していきたいという気持ちが強いことが示された。
⑥母親としての自己 の位置づけ	「自分がすごく強いから、自己主張が強すぎて、悪く言えば母性本能が無いかもしれない。」 「基本的に母親の部分があって、基本的に友達の中の自分というか、友達との付き合いの自分もいたりして。いっぱい色々なチャンネルがあるけど、母親はその中の一つかなって思うけど、やっぱり責任があるじゃないですか。子どもに。」	母親という意識や母親としての自信はあまりないと感じていた。母親としての自分は、自分が持つ色々な側面の中の一つという捉え方をしていることが推察された。母親としての自分と、それ以外の自分との違いを責任があるかないかと捉えていた。
⑦個人としての自己 の位置づけ	「子どもって『～君のお母さん』って言うんですよ。だから、『違うよ』って。『そうだけど、名前があるんだよ。Gって呼んで』ってみたい。」 「(母親としての自分を除くと) もうそのまんま『G』みたいな感じ。結構子供置いてご飯食べに行くと、その後岩盤浴行ってみたいなのも2ヶ月に1回くらいは絶対するんです。やっぱり自分のエネルギーじゃないけど活力になるんです。」	母親は自分の中の一側面であり、それを除いた自分が本来の自分と捉えていた。また、母親としての役割を離れて個人として過ごす時間を大切にしていることが推察された。自分の生き方について、強い意志を持っていることが推察された。
⑧子育てを通しての 悩み	「まさか自分がストレス与えているとは思ってなかったから、すごい意外。」 「振り返るのは好きじゃないんだけど、性格的に。だけどやっぱりこうなったからには、何かあったんかなっていうような。」 「すごいなんか、もうちょっと自分が関わったらいいんじゃないかなって。」	子どもの問題をきっかけに、これまでの関わり方に自信をなくしており、戸惑いをもっていることが推察された。また、これまでの子どもとの関わり方を反省し、改善していきたいという思いがあることが示唆された。



### (3) 母親中心群

母親中心群は、母親になる以前では、将来の見通しや目標が漠然としており、自分自身が「こうしていきたい」というような意志がみられなかった。また、母親であることに積極的に関与しており、母親であることが自分の根本となっていると感じていることが示された。一方で、今後の自分の見通しについては、母親という役割を離れた自分についての自信の無さがみられ、今後の希望や明確な目標はもっていないことが示された。これらのことから、母親中心群の母親は、「個人としての自己」が自分の中で十分に育てていないなかで、「母親としての自己」を全面的に受け入れ、「母親としての自己」を自分の中心に据えて支えとしていることが推察された。

母親中心群の母親は、「個人としての自己」が漠然としているなかで、母親になることによって得た「母親としての自己」を吟味することなく、そのまま自己の中心に取り入れていることが示唆された。「個人としての自己」がはっきりとしていないため、「母親としての自己」との葛藤を経験することは無く、子育てによる制約感を感じていないことが推察された。しかし、Fさんは、今後子どもが離れていくことを考えたときに、母親として以外の自分が無いことに不安を感じており、子どもの成長とともに、今後「母親としての自己」と「個人としての自己」との葛藤を経験する可能性があることが示唆された。

母親中心群の母親が感じている育児の困難さについて、研究Ⅰでは、育児を通しての充実感は何ら得られていないが、育児による閉塞感を強く感じていることが特徴として示された。このことについて、母親中心群の母親は、「母親であるために自分のやりたいことができない」といった制約感はありませんが、母親以外の自分がいないことに対する不安や自信の無さを持っており、また、母親として以外の自分を求めることをしていないために、子どもとの関わりが中心となり、子育てのなかで孤立感や閉塞感を感じているのではないかと推察される。

岡本(1996)は、母親意識は高いが、個としてのアイデンティティが低い「伝統的母親型」の特徴として、現在の生活や将来についての主体性がなく、自分の人生に対して明確な意識を持っていないが、子育てに対しては積極的に取り組んでいることを挙げている。この特徴は、本研究における母親中心群の母親の特徴と一致した。岡本(1996)は、「伝統的母親型」は「個としてのアイデンティティ」と「母親アイデンティティ」との間の葛藤は少ないと推察しているが、本研究において、母親中心群の母親は、現在の「母親としての自己」と「個人としての自己」との間の葛藤は少ないが、子どもが成長し、離れていく将来において、「母親としての自己」と「個人としての自己」との葛藤が起こる可能性が推察された。

Table 14. 母親中心群 (Cさん, Fさん) の特徴的な語りと考察

分析カテゴリ	特徴的な語り	考察
①母親になる以前の 将来設計・母親に なることへの意識	「(自分の将来について) 忙しすぎたんで。もうあの、とりあえずものすごい忙しすぎたんで。そんな考える余裕も無いよというか。」(C) 「(将来の目標) 特に無かったですね。私, すごい甘やかされて育ってきたんです。だから, あんましこう考えたりとかしてなくて。」(F) 「何にも考えて無かったです。子供が将来できるとかも特に考えてなかったかな。」(F)	将来の見通しや目標は考えられておらず, 漠然としており, はっきりとしていないことが示唆された。自分自身が「こういうことをしていきたい」というような, 強い意志はみられなかった。自分が母親になることのイメージも描けていなかった。
②妊娠時の気持ち	「これまでの仕事が変わってしまうとか, そういうことすら産まれるまでは考えていなかったです。というよりも, 子供がいての生活とかを想像できなかったですね。」(F) 「妊娠したときに, そこらへんも全部割り切ってしまったんでしょうね。妊娠してるって受け入れた時点で, 自分の時間がもちろん無くなるのも, もう, 周りの人を見て悟ってたし。」(C)	自分の生活が今後変化していくことに関しては, しかたが無いことと割り切ったり, 生活の変化を予想することすらできなかったりしたために, 生活の変化について不安や迷いはなかったということが示唆された。
③子育てにおける 制約感	「子供と自分が一緒にいるのが当たり前というか。離れるのが嫌だったんでしょね。母子の一体感じゃないけど, 安定感なんだろうって。」(C) 「昼間はテレビつけないんですけど, 子どもが寝た後にテレビをみればいいし。どうしてもドラマがみたいとかいう人だったらつらいかもしれないけど, 私は夜にニュースがみられればいいかなっていうくらいだから, そういうので特に不満とか我慢とかもないです。今は子どものことをするのが楽しいんです。」(F)	子どもと常に一緒にいる生活に対する制約感や, 自分ひとりの時間が減ったことによる制約感はほとんど感じていないことが示された。子どもと一緒にいられることに幸せを感じており, むしろ「子どもと一緒にいたい」という気持ちが強いことが示唆された。
④子どもの存在の 意味づけ	「母親って言うのはやっぱり, その子の母親は一人でなくちゃいけないっていうのがあるんで, ある意味, 自分の帰るところっていうか, 自分自身であるというか。一番根本でなければいけないんだなっていうのが思いますね。」(C) 「かわいかったし, その時, 子供がすごく欲しいと思っていた時に子どもが出来たから, 子育て中心の生活に不満はなかったですね。もう, 今やるべきことはこれ(子育て) だなって思って。」(F)	子どもの存在を, 自己の存在意義, 自己の現在の生活の支えとしていることが示唆された。子どもがいるからこそ今の私がいるという思いが強いことが推察された。また, 無条件に子どもをかわいいと思う気持ちがあることが示唆された。
⑤今後の見通し	「その時にならないと分からないというのが正直なところですよ。昔は自分を試したいか思っていたんですけど, 今は自分に自信が無くなって, 外に出たいかと思わなくなってしまいましたね。」(F)	自分の今後に対して, 母親という役割を離れた自分についての自信の無さがあることが示唆された。「こうしていきたい」といった明確な目標もないことが推察された。
⑥母親としての自己 の位置づけ	「母親であることは自分の帰る所があるというか。ちょっと難しいかもしれませんが, 仕事はあくまでも替えができるじゃないですか。別に私じゃなくてもっていうのがあるけど。」(C) 「ただの母です。それ以外の何者でもない。職業が母親って感じですよ。常に母親。多少情けないところもあるけど, しょうがないのかなって。」(F)	母親であることが自分の根本となっており, 現在の自分の中心となっている。また, 母親であることにコミットしており, それに対して不満はないが, 不安はあることが示唆された。
⑦個人としての自己 の位置づけ	「それ(母親)が無くなったら, 今は何も無いですね。特に特技もないし。悩みも子育てのことしかないから。お気楽な人ですよ。それって。母親というところを取ったらって言われたらきついですね。何も残らないんで。」(F)	生活の中心が母親であり, 母親として以外の自分が無いことに情けなさを感じていることが推察された。個人としての自分について漠然としていることが示唆された。
⑧子育てを通しての 悩み	「不安とか不満とかっていうのは, 子どものことについての不安や不満だけ。自分のことについては全く無かったです。だから最近, 子どもが離れてしまったらどうなるんだろうと, ふと不安になった時がありました。この次に何をするか考えとかなきやなって思ったりもしました。でも, その時には状況が変わってるから, またその時に考えればよかったなって思って。」(F)	子育て中心の生活に満足しているが, 今後子どもが離れていくことへの不安や, 母親として以外の自分が無いという自信の無さがみられた。それに対して, 積極的に取り組んでいるわけではなく, 先送りにしていることが示唆された。

#### (4) 統合群

統合群の母親は、母親であることに充実感を感じ、子育てに積極的に関わっている一方で、個人としての自分も大切にしていきたいと考え、個人としての自分になれる時間を作るために自ら行動を起こしていることが示された。また、母親であることによって仕事をするうえでの自分も成長していると感じたり、個人としての自分に戻る時間があることによって母親として子どもと関わる時にも余裕が持てるようになったり、育児のストレスと仕事のストレスとがお互いに中和できていると感じていたりすることが示された。統合群の母親は、母親であることが「個人としての自己」に影響を与え、仕事など個人としての自分があることが「母親としての自己」に影響を与えているといったように、「母親としての自己」と「個人としての自己」とがお互いに影響を与え合っていることを自覚できていることが示唆された。また、「個人としての自己」を成長させていくことを視野に入れた上で、今を「母親としての自己」を中心に置く時期と位置づけていることが示唆された。統合群の母親は、「個人としての自己」がしっかりと確立されている上で、「母親としての自己」も自己の中心に置かれており、二つの自己がお互いに良い影響を与え合い、二つの自己のバランスが上手く保たれていることが推察された。

統合群の母親は、子育て中心の生活の中で、外との関わりを持たず、母親という役割を離れた自分が無い状態に閉塞感や孤立感をつのらせ、「個人としての自己」を求める思いと「母親としての自己」との間で、葛藤を強く感じていたことが明らかになった。そのうえで、その葛藤を解決するために外と関わるができるように行動を起こし、個人としての自分の時間が持てるように自ら積極的に取り組んでいたことが示された。このような葛藤の過程を経て、「母親としての自己」と「個人としての自己」とがバランスをとれるようになり、現在では二つの自己を上手く両立させ統合していることが推察された。

統合群の母親が感じている育児の困難さについて、研究Ⅰでは、他の群に比べて感じている育児困難が全体的に低いことが特徴として示された。統合群の母親は、初めての育児に戸惑いを感じ、母親という役割を離れた自分が無いことに葛藤を感じ悩んできたが、その経験を経て現在では「母親としての自己」と「個人としての自己」とが上手くバランスがとれており、落ち着いた状態であることが示唆された。その上で、教育費など経済的な心配や、子どもが離れた後に何か自分でできることを探したいが再就職が難しいといった悩みなど、今後予想される問題についての不安や心配を抱えていることが明らかになった。

Table 15. 統合群 (Aさん, Bさん, Dさん, Eさん) の特徴的な語りと考察

分析カテゴリ	特徴的な語り	考察
①母親になる以前の将来設計・母親になることへの意識	「まだ仕事をしたいというのがありまして、出来ると簡単に結構思っていましたね。絶対辞めないで働こうとはその時は思っていましたね。」(E) 「仕事を辞めるのに自分の中でルールを決めて、子供ができたらず辞めるって決めてた。」(D) 「結婚したら子供産むのが当然と思ってた」(A) 「なりたいとは思っていたんですよ。あまりそういうマイナスなこととかも考えずに」(B)	出産後も仕事を続けていくことや、子供を持つことなど、自分の将来について、自分なりの希望や予定を持っていたことが示された。結婚したら母親になることは当然のことで、自分も母親になりたいという想いがあったことが示唆された。
②妊娠時の気持ち	「妊娠が分かったときは、なんか、ただ嬉しいばかりで、なんか、不安とかも無く。」(B) 「(生活が変わる不安) そういう風な考えでの不安は無かったと思います。」(E) 「(母親になると実感したのは)それは、やっぱり、妊娠したことがわかったときですね。」(B)	子どもができたことに対して喜びの気持ちとともに、母親になる実感を得ていたことが示唆された。また、自分の生活が変化することに、不安や迷いがなかったことが語られた。
③子育てにおける制約感	「子供にべったりで外に出れない時期とかもあるでしょ。旦那に向かって『外に出れていいね』と言ってたんです。で、働きたいって思って」(D) 「とにかくずっと向き合っていないといけないなかったんです。それも楽なんだろうけど、我儘なんだけど、つらかったりして」(B) 「自分もなんかやりたいって言って、教室に通わせてもらうようになったんですよ。」(B) 「保育所、待機児童待ちだったんです。お姑さんを拝み倒して週に3回在宅の仕事ももらって、お姑さんのところに子供を何時間か預けて見てもらって、仕事をしてるっていう状況作って。」(D)	子供と常に一緒にいなければならないことに閉塞感を感じ、外との関係がもてないことに不安などを抱えていたことが示唆された。それに対して、つらいから避けるということではなく、外に出たいという思いを強めて、自ら外と関わる努力をし、仕事や習い事など、具体的に自分自身がやりたいことを見つけ、それを得るために行動をおこしていたことが示された。
④子どもの存在の意味づけ	「やっぱり大変だけど子どもがいない生活は今では考えられないし、子どもがいるからこそ、こういう喜怒哀楽も生まれるし。」(E) 「子供の成長とか日々の子供の笑顔で、大変なことでもいいあるけど、それが全部消えてしまうっていう感じで毎日過ごしているんです。」(B)	子どもがいるからこそ充実した今があるという思いや、精神的に支えられている、子どもがいること自体が誇りといったように、子どもが持つ精神的な価値を強く感じていることが示唆された。
⑤今後の見通し	「自分も何か仕事ではないけど、打ち込める物を持っていたいとは思ってるかな。」(B) 「子どもが独立してから、2人で例えば旅行するとか、ゆっくりできるっていうのが、すごく楽しみです。」(A) 「まだできる範囲で、パートでも仕事してみたいなっていう部分もあって。」(E)	子育てが一段落したら、夫との生活を楽しんだり、打ち込めるものや仕事などをみつけたいしていきたいという思いがあることが示唆された。
⑥母親としての自己の位置づけ	「今は母親であることに満足しています。」(E) 「子供がいるっていうこと自体が誇りですよ。自分はただ働いてるっていう女の人じゃなくて、ちゃんと子どもがいるってことが」(A) 「(母親になって)仕事に対して責任感が逆に強くなった気がする。普通、手抜きそうな気がするじゃないですか。でも、周り見ても、ママになった人ほどちゃんと仕事してちゃんと帰る」(D)	母親である自分をしっかりと受容できていることが示唆された。個人としての自分に戻れる仕事を大切にしていたり、個人としての自分になれる時間を求めたりと、個人としての自分も重視していることが示された。母親であることで個人としての自分も成長し、母親であることが個人としての自分の誇りとなっているといったように、「母親としての自己」と「個人としての自己」とが、お互いに影響しあい、お互いの支えとなっていることが示唆された。
⑦個人としての自己の位置づけ	「育児のストレスと仕事のストレスを中和できているかなあと。」(A) 「だから、個人に戻るのには、ほんとに会社にいるときとか、仕事だけのよう気がする。」(D) 「ほんの少しの時間でもいいから、自分のことだけ考えていれればいい時間があったらって。」(B)	
⑧子育てを通しての悩み	「上の子のときは、やっぱり私も初めてだったので、全部戸惑ってばかりで。」(B) 「3人いるので、それこそお金がかかるっていうのはありますよね。」(E) 「今は働けたらなって思ったりする時もありますけど、年齢制限もあるよってひとに言われてもう探せなくなっちゃったりとか。」(E)	初めての子育てにおいて、戸惑いの気持ちを持っていたことが示された。現在は教育費などの経済的な不安など、子どもの成長に伴う心配があることが示された。また、再就職が難しい現状についての悩みなどもあることが示された。

## 総合考察

本研究は、「個人としての自己」と「母親としての自己」という視点から育児期の女性を捉え、二つの自己のあり方と葛藤の特徴との関連、及び育児困難との関連を検討することを目的として行った。

まず、「母親としての自己」と「個人としての自己」のあり方によって、二つの自己の葛藤への関わり方が異なることが明らかになった。未熟群は、「個人としての自己」が漠然としており、「母親としての自己」も受容されておらず、「母親としての自己」を受け入れる時点で葛藤が経験されており、現在もその葛藤の渦中にあることが示唆された。個人中心群は、「個人としての自己」を重視した生き方を志向して葛藤を回避しており、母親中心群は、「個人としての自己」が漠然としているため葛藤が経験されていないことが推察された。しかし、個人中心群はこれまでの子どもとの関わり方に迷いを感じており、母親中心群は母親として以外の自分が無く子どもが離れていった後の自分の生き方に不安を持っていることから、共に、今後「母親としての自己」と「個人としての自己」との葛藤に直面することが予想される。統合群は、二つの自己の葛藤に悩み、その葛藤に積極的に取り組んで乗り越えたことにより、現在では二つの自己のバランスが上手くとれており、統合されていることが示唆された。統合群の葛藤体験の過程から、二つの自己を統合させていくためには、葛藤をしっかりと経験し、それに対して主体的に取り組むことが必要であることが示唆される。

また、二つの自己のあり方により、それぞれの母親が抱えている育児の難しさの質と程度が異なることが示唆された。未熟群の母親は、「母親としての自己」を受容できていない状態で子どもと向き合わなければならない、母親としての不全感を感じ、育児における難しさを強く感じていることが示唆された。また、個人中心群の母親は、「個人としての自己」を重視し、育児による制約をうけないように自ら対処しているため、育児による閉塞感や低いが、母親であることを重視していないために子育てによる充実感が得にくいのではないかと推察された。母親中心群の母親は、「個人としての自己」が漠然としていることに不安や自信の無さがあり、また、個人としての自分を求める気持ちが弱いため、子どもとの関わりが中心となり、子育てのなかで孤立感や閉塞感を感じていることが推察された。統合群の母親は、二つの自己の葛藤を経て、現在は二つの自己を両立させて落ち着いた状態のため、抱えている育児における難しさの程度が他の群に比べて低いことが示唆された。これらのことから、母親の自己のあり方や、葛藤への関わり方といった点から母親の特徴を捉え、母親ひとりひとりに対応した育児支援のあり方を考えていくことが必要であることが示唆される。

最後に、今後の課題として以下の2点が挙げられる。まず、調査方法における課題である。本研究では、研究Ⅱにおいて面接調査を行った。しかし、面接対象者の人数が少なく、分類の結果、未熟群と個人中心群に含まれる対象者は各1名であった。このため、各群の特徴として見出されたことは、各対象者の特徴にすぎない恐れもあり、研究ⅠのSCTで示された群の特徴と、面接調査で示された特徴が矛盾している点もみられた。このため、今後面接対象者を増やし、各群に含まれる対象者の共通の特徴を検討し、より一般化できるような分析を行うことが必要であると思われる。

次に、二つの自己の葛藤についてプロセスの視点からの検討という課題である。本研究では、「母親としての自己」「個人としての自己」の様態を横断的に捉えた。しかし、SCT反応において、未熟

群は子育てを通して自分を見つめ直していることが示唆されたことから、未熟群の母親は現在葛藤の最中にあり、この葛藤において自分を見つめ直す経験を通して、二つの自己を成長させ葛藤を乗り越えていく可能性が考えられる。また、葛藤を回避していると推察された個人中心群と、葛藤が経験されていないことが推察された母親中心群は、今後葛藤に直面し、それへの取り組みによっては、二つの自己を統合させていく可能性が考えられる。これらのことから、今回捉えた母親の自己様態群は固定的なものではなく、今後推移していくことが考えられる。そこで、未熟群、個人中心群、母親中心群がどのようなプロセスを経て葛藤を統合させていくのか、また、葛藤を乗り越えることを促進させる要因は何かといった点について、今後検討していくことが必要であると思われる。

## 引用文献

- 平山順子 (1999). 育児期における専業主婦の個人化欲求—経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に— 発達研究, **14**, 62-77.
- 岩田美香 (1995). 育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク 北海道大学教育学部紀要, **68**, 191-233.
- 岩田美香 (1997). 「育児不安」研究の限界—現代の育児構造と母親の位置— 教育福祉研究, **3**, 27-34.
- 柏木恵子 (1998). 社会変動と家族発達 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房 pp. 5-50.
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究, **47**, 170-179.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, **5**, 72-83.
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安> 家庭教育研究所, **3**, 34-50.
- 本村汎・磯田朋子・内田昌江 (1985). 育児不安の社会的考察—援助システムの確立に向けて— 大阪市立大学生活科学部紀要, **33**, 231-243.
- 中西雪夫 (1996). 乳幼児をもつ母親の性格と育児不安 佐賀大学教育学部研究論文集, **43**, 113-119.
- 岡本祐子 (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, **47**, 849-860.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美 (1995). 最近の子供を愛せない母親の研究からみえてくるもの 家族研究年報, **20**, 20-31.
- 武内珠美 (2002). 妊娠・出産・子育てをめぐる女性の心理と問題 岡本祐子・松下美知子 (編) 新女性のためのライフサイクル心理学 福村出版 pp. 151-172.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265 - 273.
- 谷口和加子 (1997). 就労女性と育児不安—職業生活関連要因からの検討— 生活社会科学研究, **4**, 17-29.